

F A I T H

—日本人とキリスト教—

遠藤文学の魂

奥村 一郎

狐狸庵の別名で親しまれてきた遠藤周作さんが帰天されて三ヶ月近くになる。告別式の日はずばらしい秋晴れの10月2日。カトリック教会の典礼では、「守護の天使」を記念する日であった。教会の神学では、すべての人にひとりづつの守護の天使がついてくれていると信じられている。あの美しく、悲しかった日は、東京・四谷教会の周辺を三列になって長い垣をつくる7000人もの参列者とともに、天使の「レクイエム」の葬送曲にのせられて安らかに神のもとに帰られたことであろう。

『沈黙』と「第二バチカン公会議」

遠藤さんと同年であるわたしは、かなり前から知りあっていた。というのも、戦後まもない頃、二人が前後して同じくフランスに旅立ってから、遠く近く、その消息を耳にしていた。遠藤さんは文学研究、わたしはカルメル会の修道院に入るためであった。それに、当時遠藤さんが研究目的にされていたF・モーリャック (1885～1970) が、ブドウ酒で名高い町ボルドウ近郊にあったカルメル会修道院付近に住んでいた。そのこともあって、修道院を訪ねてこられたことも耳にしていた。しかし、とくに身近に感じるようになったのは、問題作『沈黙』が掛けにされた頃からである。1966年のこと、カトリック教会にとって最も大きな画期的出来事であった「第二バチカン公会議」(1962～65) 直後の年である。

平均、100年に一度ぐらいしか開かれない、カトリック教会の公会議は、西欧を中心とした世界状況の大きな転換期のある毎に、教会の刷新と、新しい路線を決定するため、世界的規模で総力を結集して行われる重要な会議である。「第二バチカン公会議」の新しい方向づけのスローガンは、「開かれた教会」ということであった。ここで「開かれた」というのは、単にキリスト教の宣教のことではない。一方通行の開かれ方なら、初代キリスト教のときから、いつどこでもなされてきたことである。そこで問われたのは、従来のカトリック教会の独善的、閉鎖的、排他的姿勢のことである。その旧弊を破ることが「開かれた教会」ということである。まず、キリスト教の中での超宗派対話による「教会一致 (エキュメニズム)」の働きかけ。次に、他宗教に対して開く「宗教対話」と、社会活動のための諸宗教との協力。三番目には、当時なお国際世界に大き



奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年生まれ。東京大学法学部政治学科卒業。48年、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書に、『断想』『主とともに』『友の祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所) など多数。

な支配力を及ぼしていた無神論共産主義との対話を拓くことであった。この、宗教およびイデオロギーの対話は文化と切り離せない。そこで各国の各民族固有の文化が福音の血となり肉となるようにする「文化的受肉 (インカルチュレーション)」という課題がでてきた。つまり、バタクさいキリスト教とか、ときに「文化的植民地主義」というような手厳しい批判がカトリック教会の内外で強く出てくるようになった。その頃に力強い警鐘を鳴らしたのが遠藤さんの『沈黙』であった。

ころび切支丹の宣教師フェレイラは寂しそうにいう。「私には、だから、布教の意味はなくなっていった。たづさえてきた苗は、この日本とよぶ沼地でいつの間にか根も腐っていった。私はながい間、それに気づきもせず、知りもしなかった」

そのような日本人、そのような文化の反キリスト教的体質を素材とした『沈黙』の著者は、最後に「踏絵」の場面の描写において、さらにパンチのきいた決定打を放った。

(踏むがいい) と哀しそうな眼差しは私に言った。(踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから)

その時彼は踏絵に血と埃とでよごれた足をおろした。五本の足指は愛するものの顔の真上を覆った。この烈しい喜びと感情とをキチジローに説明することはできなかった。

その頃、わたしも何度か『沈黙』の読書会に呼ばれて討論をした

こともある。やがて、いくつかの外国語に翻訳されてくると、もともと陽性文化の議論好きな宣教師や神学者のあいだで侃侃諤諤、とくに「殉教」の真の意味について論議された。発想の視点は、すでに芥川竜之介の『奉教人の死』に近似したものがあったが、熱心なカトリック者としての遠藤さんの力作であったということと、折も折、カトリック教会が「第二バチカン公会議」を通して「文化的受肉」を公式の姿勢として宣言した時であったことから、『沈黙』が投じた波紋は大きかった。

盛んな日本人論、日本文化論の中で

それから5年もたたないうちに、イザヤ・ベンダサンの匿名で出された、『日本人とユダヤ人』は、学問的かつ極めて独創的な発想のもとに、日本におけるキリスト教の宣教不可能論を鋭く打ちだし、火に油をそそぐようなことになった。周知の「日本教論」である。聖書学者としても知られた故山本七平の持説といわれる。

この60年代の後半から、一方で日本人論、日本文化論が盛んになり、キリスト教の宣教にとっては逆風となる困難な時代となつて今にまで至っている。その間も遠藤さんは、最後の書『深い河』に至るまで、独自の日本文化論の線で精力的な創作活動をつづけられた。そこに一貫するものは、こよなく愛する日本人の心にキリスト教を根づかせたいという願いであった。わたしにも何度か「対談」の機会が与えられたり、また、主宰しておられた「芸術センター」にも招かれて、代表的な知識人の集まりの中で「仏教とキリスト教」について話をさせてもらったことがある。他界後まもなく朝日新聞の『天声人語』にその逝去がとりあげられたが、「遠藤にはカトリックの支柱が、ずっと通っていた」と結ばれていた。また、「いろんな主題をつぎつぎと書くなつてことはできないだよ。結局人生の中で探しているものは、同じものなんです」という遠藤さんの言葉もそこに引用されていた。(1996年10月1日付「天声人語」) 文化的受肉

「同じもの」、わたしが出会った遠藤さんが生涯求めて変わらなかったもの、それは、キリスト自身との出会いであったように思う。キリストは、神というだけのものではない。人間となった神、すなわち、人間の尊厳と悲惨とを、もろに身にうけた神の子であった。

また、ヘブライ文化の伝承に生きたユダヤ人でもあった。日本人にも、2000年をさかのぼる文化伝承がある。糧なくして命は保たれない。そのように福音の命であるキリストが、この日本において生きるためには、その伝統文化の糧をとらなければならない。そのことが、先にもあげた「文化的受肉」ということである。

昼と夜、太陽と月ほどに異なる東と西の文化は、対立するものではない。共に生かされて、キリストの愛による全人類の救いの神秘を露わにする時がいつかくるにちがいない。狐狸庵先生は、自分を笑うことのできるユーモアのなかに、病む人、貧しい人、悲しむ人の心を汲み、その人々と共にあるキリストの愛に生かされた信仰の道をひたぶるに歩き抜いた。

残された、その豊かな文化遺産が、日本の明日をつくりだす原動力となることを願ってやまない。

BRETT WESTON

ブレット・ウエストン

FORMS

1.13 MON - 2.28 FRI, 1997

フォート・ギャラリー・インターナショナル

土・日・祝 休館
11:00 AM - 7:00 PM
PHONE 03-3501-9123

P.G.I. 芝浦

川田 喜久治 作品展
「ゼノン:ラスト・コスモロジー」
11.12 TUE, 1996 - 1.24 FRI, 1997

第2・第4土曜日・日・祝 休館
11:00 AM - 6:00 PM
PHONE 03-3455-7827



PHOTO GALLERY
INTERNATIONAL